

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



倭二十四孝

樂亭著

上

住吉
神
感孝

天保十
己春



全三冊

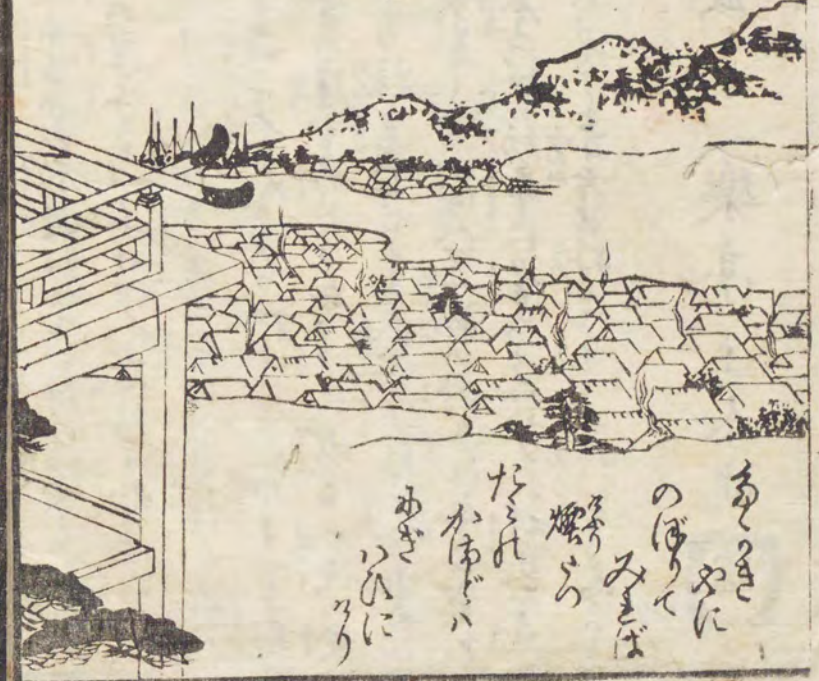
倭二十四孝

乙巳孟春
大榮堂版

史唐王れ二十四孝ハ佳者ナリ 童蒙の教誨に於ては此の漢より永く
 世に傳へ來りぬる四箇縣州の孝子よりふサに人有限なる如く
 日の奉る神徳の功一よりかへりて仁義五常は道なきは石乃
 れせぬと傳へたりて孝子貞女幾千人も有りて 此今の世に於ては新
 義烈を廢て一なるも物に當る應むるやうな事には 少女が必讀の文
 也ふ 乃て此なる物の奉るより 教書あせし大業せしむるを求めに
 いふが如く 彼唐史の廿四孝あがて二十四人を一冊の冊子に各々其を
 減ひ九牛が一毛の如きなりとて 今此の幼童に道あるぬなれば 得更をえ
 せんより 女に 勸養のやうもあらん 本意の好みにす せ 惜む下まうと

仁徳天皇

應神天皇弟仁の宮へ
 清孝行ふてせむ
 然るに父帝第五の宮に
 宮成出就宅ありて太子に
 立おれその翌年崩すひぬ
 かていらはとの宮天皇兄
 なれば清孝のけあらんと
 ののみ天皇の父の御遺云
 なまむいらはとふ
 要成治めんとてたふふ



あつて
 のぼりて
 みまほ
 煙る
 たる
 かへり
 ついに
 あり

あつてと事まで氏の首をも割る
 たり後いらはとの宮へ
 あひて天皇せんを
 御成小治きりあり



養老孝子

父の老に及
 ちては有り老
 言ふ孝行あり
 父老に酒を好めり
 子新をよりて
 その買わぬ酒を
 細中かひり
 ある時ふと薪を
 あやふと薪体めんを岩間の
 水紋すい香けを味も香も
 めて酒を飲たふするに



やぐん酒をこびて飲よあそ
 乃は老の聲もあやぐやあ
 薪の酒なりけ事

帝きにめ孝心れ
 所感ありて美酒をに
 なされその水で



丈部三子

元正天皇の御時
 漆の月文部卿の若勝
 う新をわきめたるを
 流罪に定まりたり
 若勝男子三人あり
 兄は十二次を九に其流ハ
 七なりける父が罪と
 わかり官所より
 三子あり
 けと免れもほる
 父の罪とゆる



三人とぞ
 あげたる
 けき不
 帝聞ゆ
 感のひ
 父が
 けを
 あり
 あり

[illegible]

その方ねがふべくしてさうふ事いせざりし
い致十郎毎月柴を刈りてづれ代になつて母と

中より父が今日
よの紫と寺の門下

のち西に去るなりしと云ふ事
 有りともなき事なりと云ふ事
 とて礼を以て之を祭らざるべし
 は村のありきと新小寺かといふ
 その内、柴とわかれすてかゝる
 礼を以てせざるべしと云ふ事
 のありき田地も廣く耕さるる
 あつた人も不便にならぬ所
 出づるといふ事一時は是れ



▲ 多小東と云む
とありぬと云
かへりて化なりかる 正史
考なりと云司子も
ゆへ木ありと云なり
云て因に云ふなり

矢田部黒磨

武花園入間形の人なり

父母にねく孝あり

けろ父母

むはくありけり

悲しふた人を

十六年の間あき

食物をて移進し

引ふりぬる

帝此う聞か

感ふ

門ふあきとて

奉貢をの

りあれ

役とあきその

孝行をりり

先仁天皇

神代あり

七日



藤原衛

賜方丈の藤原に

内膳の第十に

常なる子なり

二葉にえぬに

おんまゝみ葉のそ死

おあき事と

さつねに深く

悲しめる有さぬ

年たけら

今歌ふ

むすの

人

唯

人

あ

あ

あ

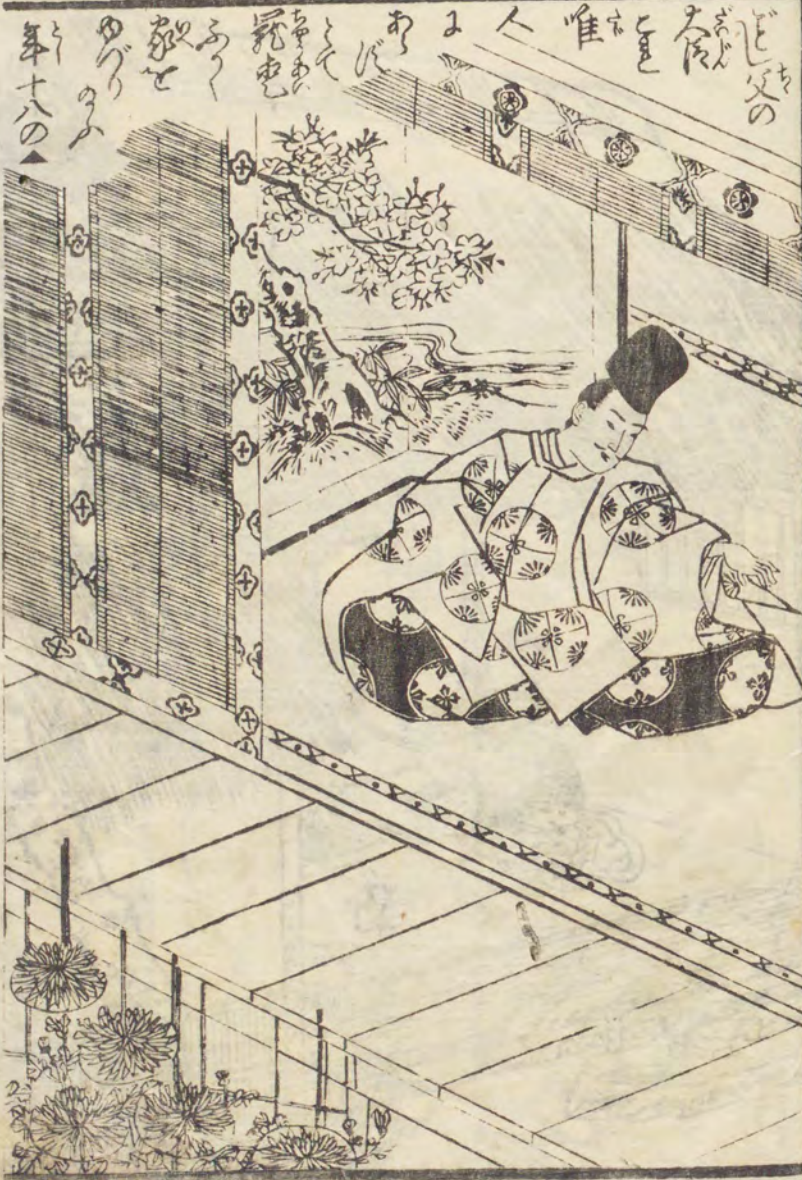
あ

あ

あ

あ

年十八の



源氏物語

お智人よすれ

時の人

あけと

あけと





中



全三冊

倭二十四孝

乙巳孟春
大榮堂版

波自采女おしのなめ

采女ハ對馬の上

あぐと那のへなり

不幸以是交不罕く後是

うがも^{いも}賤うう極むるふの

救多ありけれどもかゝはりて

再びまふまゝに只父母まつて

孝はじ父母をまづりけむ

裏汁刀り口庵とんぶりおろ

と祈へる六時の席

稱德天子之盛

あり

七四

すなわち

その貢銭

五

姓名

毒

3

紀夏井

忠臣のげま
従に佐下紀

善孝のこころ

心清く学文おぼ

えて仁壽の帝れ

四龍屯にあづかり

右中辨ふり

孝行あるて世すまれ

るむりあふをこそ

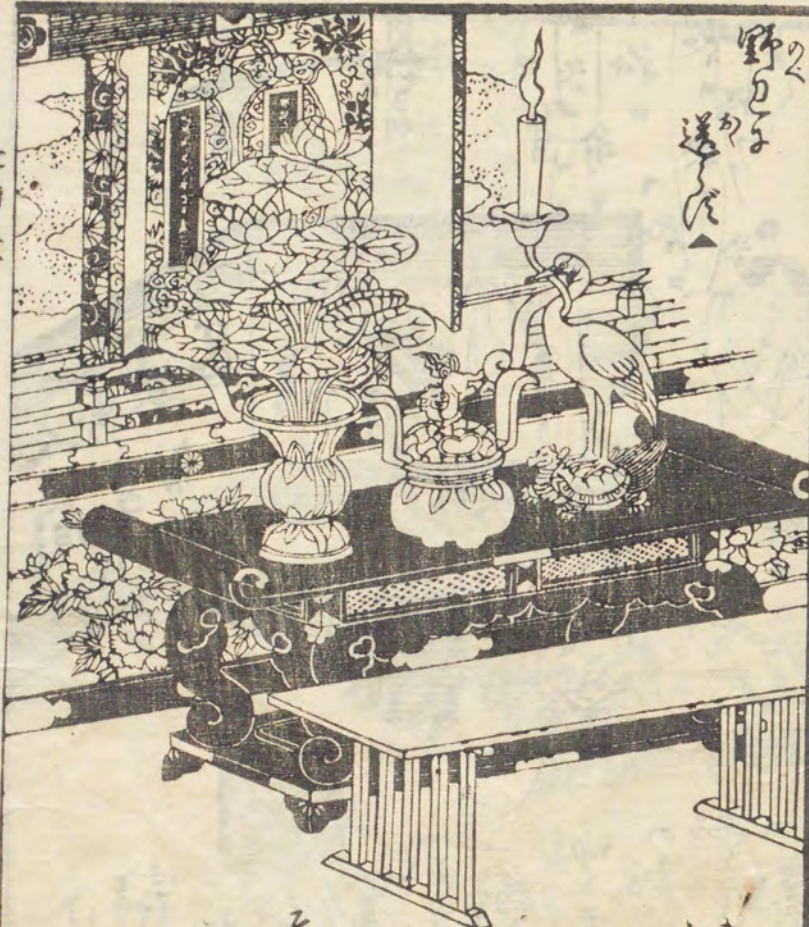
悲しきふれをのれ



あふ
堂で
泣いて
その

野のよ

送る



うちふ納め
朝夕をきふ
ひまを

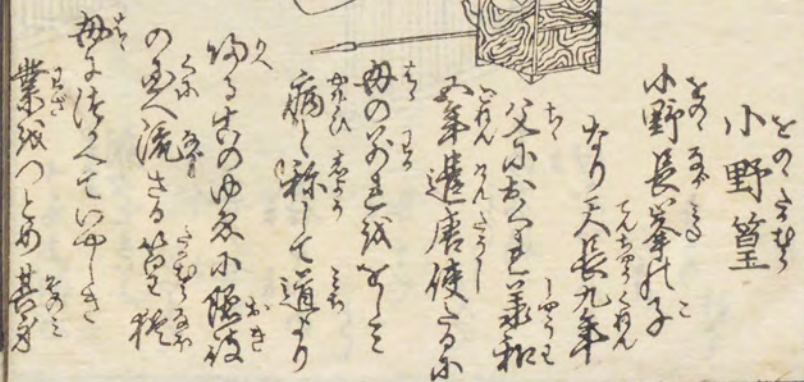
父母の世ふ
在る時の

ふまを
仕え

その孝行
世ふりるを

かれ
け

け



小野篁

小野長兼このの ながかね

なり 天長九年

父ふかきと義和

子孫遷唐使方不

母のふと成す

病を稱して道なり

ゆき
すのめ
冬小強波

おき

のふたつは、
流るる草花
花

抄子法之中心

業紙のとめ甚だ

やせきふすでゆ

孝乃父の徳と

たふん方其

羽衣事古歸されん

參議從亡位不

叙世に及ぶ

う
海
う
う

朝の大儒と

あふぐま



丹生弘吉

丹生弘吉の民なり
 父のいけなせかき
 母の考なるて國人ふあえ
 たりり死ねんかき
 先父の墓所ふあえ
 涙を流し経る痛
 秘人ふあえ
 母の公もよ
 慰めて出
 ゆたたり



されば
 その望
 名心
 新の
 人



水の人の田舎
 水損旱稼の愁あり
 密も入らざりけり
 仕事月程にせり
 百出さきにて

その國風
 今も伝ふ
 のわじとなり

わやえのうきふ
大匠働け子ふて母を

赤澤藩門あり、奉周おのき、病中

頼すとぐと見えけとは

あまの
赤染
下
ひて

すまふ 中々心
何事不備



子^こ那^な子の命^{いのち}にかゝると



祈^{うせいの}望^{ぼう}を^をて^てお^うふ

かゝる人々を祈る金、カネハ、カネ

此の由りて入るは多し

いふまゝ　いふまゝ　いふまゝ
とあるをのりければ常用と誤り

いんちきとて母をいふべ。

卷之五

卷四

大木

意を
 任音ふまうむくその海

つぎ命とて門てぬとすけふと

方とあづからぬさうなうじ

明神武天皇

あまのふたが

たつた





世々の世々
 宗像朝臣神社
 といふ人妻となり
 又社よりかき
 又社よりかき
 又社よりかき

二進にす
 天長
 天長



難波部安良賣

流流の人ゆに幼お
 より父母に孝と法
 ねにえり別きて源
 親に朝夕暮所は宿
 悲しき世ひたり十六老に同



位二級
 二級
 二級

伴直家王

あはれ
安房の玉のちの歌れ
民由て親ふ孝めかりけり
父母終りけりやふ小美金成
今もあはれこの世を
歌きくらじ二親の海成
木をえ作りけり
所ふあはれなり

あはれ
親ふ孝めかりけり

木をえ作りけり

所ふあはれなり

あはれ

親ふ孝めかりけり

木をえ作りけり

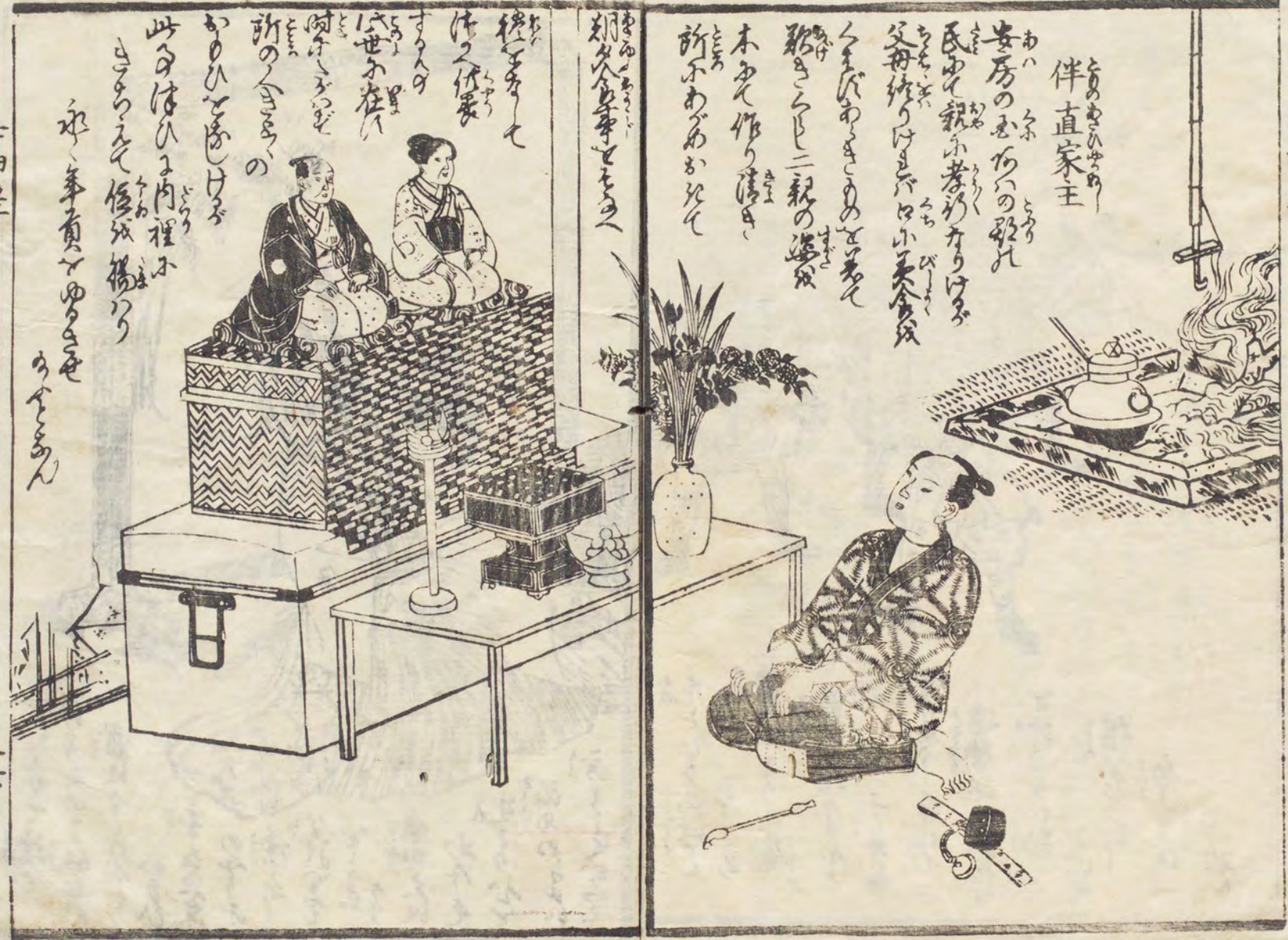
所ふあはれなり

あはれ

親ふ孝めかりけり

木をえ作りけり

所ふあはれなり







樂亭著
貞房画

全三冊

倭二十四孝

乙巳孟春 大榮堂版

信州の孝兒

信民何某と

男と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と



信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

信民何某と

佐紀民直

大和の佐紀民直といふ

所の民の直氏の娘

なり固く教の

大和志す

果安といふ

人の妻と

ぬく不幸に

あてまふ

道と

守り



男姑

孝成法にまて

継ふと口が

せうふと合せて

八人けりけりてあて

おくけりけりてあて

養育の乃孝れ

乃孝れ

むくくくあて

賢女とみえ

感づけりてあて

七四



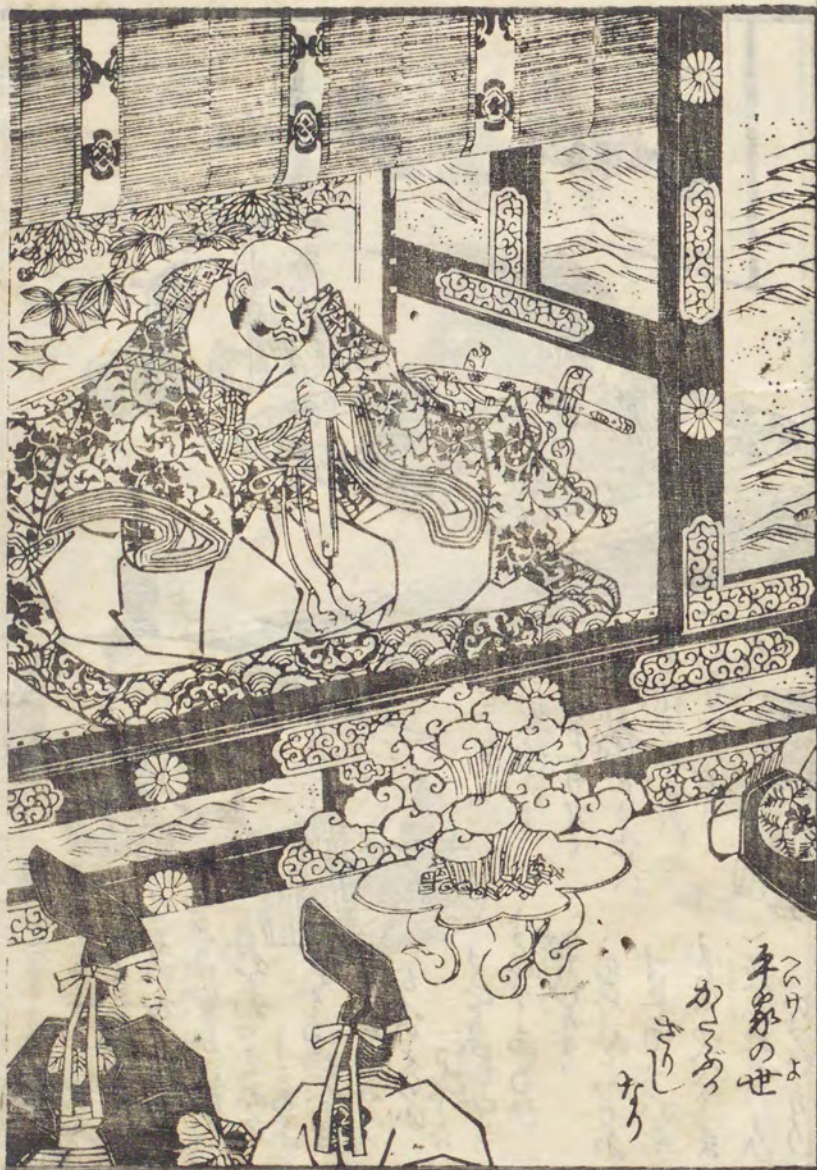
小松内大臣

内大臣重盛の平相公
 清盛の病子なりまゝ家に
 父の清盛をとりて成すは
 君成ふにけりなり民と
 苦めするはけりなり民と
 あまふなりと重盛は
 船きき神明のつゝふき世の
 世のつゝふき世のつゝふき世の
 つゝふき世のつゝふき世の



父を
 引入さんと
 いさめ
 引入さんと
 いさめ
 引入さんと
 いさめ

平家の世
 かきあ
 かり



孝子今女

大和の玉竹の内村の
 何れか娘女今女といふ人
 のと百姓もともども勤まらるる
 周知の事なりしが母は終つて
 一人の親ははたしめしめあへ
 父も年おひぬまのかせだの
 あつたを親ま
 久しおとこまうの
 おりけむだるど
 孝女をすまひ父の好む
 ののいふあつたもの
 おつたをすまひ父の好む



あつたをすまひ父の好む
 大和の玉竹の内村の
 何れか娘女今女といふ人
 のと百姓もともども勤まらるる
 周知の事なりしが母は終つて
 一人の親ははたしめしめあへ
 父も年おひぬまのかせだの
 あつたを親ま
 久しおとこまうの
 おりけむだるど
 孝女をすまひ父の好む
 ののいふあつたもの
 おつたをすまひ父の好む



孝女今女
 天より入
 うみの
 ちり



北條泰時

小條陸奥も當時の長子で
 則ち親父の格を譲るなり
 あれども父存せしは子孫を
 あり當時の父を以て宗廟に
 その所願を承けに多くは
 夫を以て元祖と爲すに改め
 海法ありけるは當時の長
 子とありては初めより父の

薩摩福依賣

薩摩の玉れやき
 氏の痕かり父母老て元
 より家多き常い病あり
 福あかちあとう人ふ
 雇いとりけ物を得て
 父母とやうひあけりあ
 あえてとちの年たあや
 父母とやうにまひのあは
 二十多にあり仁者の帝の
 あんとき奏聞あけま

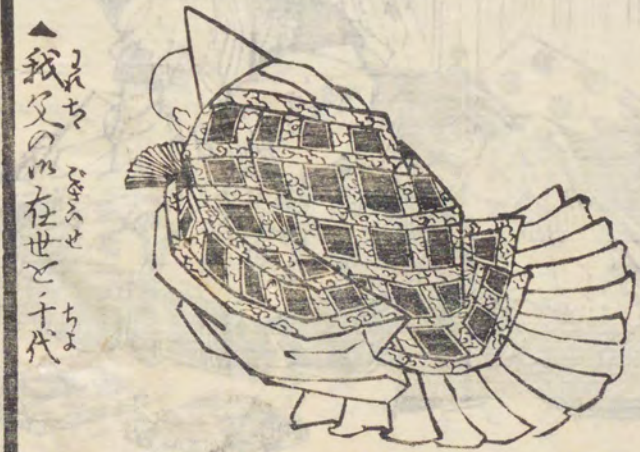


佐之級と賜り
 門小あきとて
 家常へ
 たり



後三條院 ごさんじょういん

は帝のまゝなるを電かきし
 申けるを業に小斗板
 をかきせりひたり成る信都と
 りん法源折く要折積ふ
 まのりける成る何のえられ
 以折中少斗と評させ
 うへるわと名祿
 まうけまへ
 帝関 みかみ
 めされ



▲我父の在世と十代 ちちのせいとじゅうだい



万世といふ所ゆやゆすれ
 我那後のとといふ所の
 出来はふつかりあふ
 主心のぬねやうふと
 小斗いふむあはれ
 後 ご
 要 よう
 中 ちゅう
 我那 ご
 天下 てんか
 治 ち
 あり

撰者

樂亭西馬



畫工

橘庵貞房



天保十五甲辰冬十月發市



東都書肆

日本橋通二町目

三河屋甚助

南傳馬町三丁目

三河屋善兵衛

